

英字新聞 *The Japan Weekly Mail* にみる  
ヨネ・ノグチの姉崎正治論考

A Discussion on Masaharu Anesaki by  
Yone Noguchi in *The Japan Weekly Mail*

中地 幸・星野文子・早川真理子・宮田真澄

Sachi NAKACHI, Ayako HOSHINO  
Mariko HAYAKAWA, Masumi MIYATA

**Abstract**

This paper will introduce Yone Noguchi's English article "Dr. M. Anesaki" published in *The Japan Weekly Mail* on 26 July 1913. Along with the original work, it will provide a new Japanese translation of the article to shed light on Noguchi's relationship to Masaharu Anesaki. Yone Noguchi (1875-1947), a Japanese poet who gained his international fame with English poetry books in the United States and England, interviewed another internationalist, a Buddhist scholar Masaharu Anesaki (1873-1949) before Anesaki's departure to Harvard University in 1913, where he was to lecture on Japanese culture for two years. In the article, Noguchi covered Anesaki's achievements, including his major publications, his scholarship in comparison with the German scholar Rudolf Eucken, a brief biography of Anesaki's, as well as discussing the people who helped realize Anesaki's visiting to Harvard. While Noguchi's writing style is long-winded, his respect and admiration for Anesaki are obvious. Noguchi does not mention how he got acquainted with Anesaki in the first place, but according to the article, the interview took place in Anesaki's house in Tokyo.

Recent research shows that *The Japan Weekly Mail* published quite a few articles written by Yone Noguchi; in particular, around the time when Noguchi himself was invited by the Poet Laureate Robert Bridges to give a lecture at Oxford University. Noguchi was known to translate his own work mostly from English to Japanese and/or re-publish his works elsewhere. A part of the article "Dr. M. Anesaki" is a reprint from "The Earliest Japanese Poetry" in *The Spirit of Japanese Poetry* (1913). The current paper is based on the presentation "Eiji Shinbun *The Japan Weekly Mail* and Yone Noguchi" on 12 November, 2017, for the Popular Culture Association of Japan.

キーワード：ヨネ・ノグチ (野口米次郎)、『ジャパン・ウィークリー・メール』 (*The Japan Weekly Mail*)、姉崎正治

## はじめに

本論文は、英字新聞『ジャパン・ウィークリー・メール』 (*The Japan Weekly Mail*) に掲載された、詩人ヨネ・ノグチ執筆の記事“Dr. M. Anesaki”の英語による原文と日本語訳を併記し、これまであまり研究されてこなかったノグチによる姉崎正治に関する論考を提示・考察するものである。

ヨネ・ノグチ (野口米次郎 1875-1947) は 1893 (明治 26) 年に 17 歳で単身渡米し、1896 年 7 月、ジレット・バージェスの主宰するリトル・マガジン *The Lark* (*The Lark*, No.15, July 1896) に 5 篇の英詩が掲載され詩人としてデビューした。その後アメリカで日本人として初の英詩集 *Seen and Unseen ; or, Monologues of a Homeless Snail* (1896) を、イギリスで *From the Eastern Sea* (1903) を刊行したことで知られる詩人である。ノグチの功績や生涯に関しては、Edition Synapse 社から英文著作の復刻版全集 12 巻<sup>1</sup>が刊行された他、堀まどか著『「二重国籍」詩人 野口米次郎』、ノグチのアメリカ人の妻レオニー・ギルモアに関する伝記はエドワード・マークス著『レオニー・ギルモア イサム・ノグチの母の生涯』などのまとまった研究が相次いで発表されてきた。しかし、ノグチは初の英詩発表以後、詩はもとより、ジャーナリズム風の記事や散文、翻訳などを英語と日本語の両方で雑誌、新聞、著作として発表し、多作で知られており、他界から 70 年が経った現在も、新資料が発掘され、発表されている。ことに、英語の資料は復刻版の他、インターネット上の電子版により近年閲覧しやすくなった印刷物に、ヨネ・ノグチ執筆の資料が見つかっており、改めてその多作ぶりが確認されている。

本論文で扱うヨネ・ノグチによる記事を掲載した英字新聞『ジャパン・ウィークリー・メール』 (*The Japan Weekly Mail*) は、1870 (明治 2) 年に横浜で創刊された。ヨネ・ノグチの名前が同紙に初めて見られるのは 1897 年 4 月 10 日付の紙面であり、これはノグチがアメリカで初の英詩集を出版してから数ヶ月後である。それ以降、同紙にはノグチ自身が執筆した記事が 30 本近くあり、ほかにノグチ本人の動向や著作についてなどの記事も何本か見られる。ノグチ関連の記事がことに増えているのが、ノグチが時の桂冠詩人口バート・ブリッジズに招待され、オックスフォード大学モーダレン・カレッジなどでの講演のために二度目にして最後の渡英(1913年12月から1914年6月)した少し前、1913年9月ごろからである。ノグチは多くの文章を、手を加えずに、あるいは編集して複数の出版物に投稿しており、再掲時にノグチ自身が初出を明記していることもあれば、後から研究者の手によって見つかることは、これまで幾度となくあった。今回の『ジャパン・ウィークリー・メール』に見られる、ほとんどの記事は、初出は著作や別の雑誌にあるものが再掲されたものであった<sup>2</sup>。

ヨネ・ノグチの執筆した記事“Dr. M. Anesaki” (「姉崎正治博士」) に関していえば、現在は次のことを把握している。前半の姉崎に関する部分は、今のところ他での初出や再掲載が見られない。また、同記事は、現在把握されている限りでは、ノグチが姉崎正

治について執筆している唯一の記事となる。後半の日蓮宗について書いてある部分は、*The Spirit of Japanese Poetry* (1913) に納められた “The Earliest Japanese Poetry” 内で日蓮宗に触れられている部分と内容が重複する部分もある。また、1914年1月31日付のユタ州オグデン市の新聞『オグデン・スタンダード』(*The Ogden Standard*) に「仏教の僧がハーバード大学の教員陣に」という記事が掲載されている。冒頭には、ピルグリム・ファーザーズが創設した大学に仏教徒の教授が来るということが驚きを持って語られているものの、アメリカ人からキリスト教を奪うためではなく、アメリカの教育政策の一環として世界の異なる文化について学ぶ機会を提供するためであると語られている。その後の記事内容は、奥ゆかしい姉崎を「京都人」のようだと比喻したり、仏教を布教したりするためにきたわけではないという姉崎自身の言葉なども含め、ノグチの記事と内容が非常に類似している。発行日から考えると、先に『ジャパン・ウィークリー・メール』に掲載されたノグチの記事を元に執筆されたものではないだろうか。

本論文は、冒頭に述べたようにノグチが執筆した “Dr. M. Anesaki” を資料として紹介するのが目的である。まず、本稿が掲載された『ジャパン・ウィークリー・メール』の日本における位置付けや歴史のほか、本稿でノグチが扱う姉崎正治について、背景となる同氏の生涯についても簡単に触れる。続いて、“Dr. M. Anesaki” の原文と翻訳文を記す。おわりに、生い立ちから分野まで異なるノグチと姉崎であるが、明治期に国際的な舞台に飛び出した二人の先駆的な視点を比較考察したい。

## 1. 『ジャパン・ウィークリー・メール』とは

ここでは、『ジャパン・ウィークリー・メール』の成り立ちと特徴を見ていきたい。幕末から日本で発行され始めた英字新聞の皮切りは1861年6月22日(文久元年5月15日)に発行された『ナガサキ・ SHIPPING』(*The Nagasaki Shipping List and Advertiser*) という、長崎の外国人居留地で週二回刊行された新聞である<sup>3</sup>。以降、本論文で扱う『ジャパン・ウィークリー・メール』の発行までの10年弱で、数紙の英字新聞が発行され、その中には何度かの題号や所有者の変更がされている新聞もある。

『ジャパン・メール』(*The Japan Mail*) は明治時代の横浜で、『ジャパン・ヘラルド』(*The Japan Herald*) や『ジャパン・ガゼット』(*The Japan Gazette*) と並び、「三大英字紙<sup>4</sup>」や「横浜三大英字紙<sup>5</sup>」と言われた英字新聞であった。この『ジャパン・メール』も、2つの前身から生まれ変わった英字新聞であった。最初の『ジャパン・コマーシャル・ニュース』(*The Japan Commercial News*) は、1863年5月13日にポルトガル人ダ・ローザにより発行された週刊新聞であり、休刊を経て英国人のもと銀行家C・リッカビーが権利の他に印刷機械一式も買い上げ、1865年9月創刊の『ジャパン・タイムズ』(*The Japan Times*) となった<sup>6</sup>。『ジャパン・タイムズ』は当初、週刊として創刊されたが、すぐに日刊紙、隔週紙も発行されはじめた。このようなラインナップは、同紙の次の経営者にも受け継がれただけでなく、その他の英字新聞も取り入れた形式のようである<sup>7</sup>。『ジャパン・タイムズ』を買収したH・N・レイ (Horatio Nelson Lay) と、W・G・ハウエル (William Gunston Howell) が始めたのが『ジャパン・メール』である<sup>8</sup>。この『ジャ

パン・メール』には、日刊『ジャパン・メール・デイリー・アドバタイザー』(*Japan Mail Daily Advertiser*)、海外向けの隔週刊行『ジャパン・オーヴァーランド・メール』(*Japan Overland Mail*)、海外のニュースを主体とする『ジャパン・メール・エクストラ』(*Japan Mail Extra*)の三種に加えて、毎週土曜日に発行される週刊紙『ジャパン・ウィークリー・メール』があった<sup>9</sup>。『ジャパン・メール』は、「明治期を通して親日的英字新聞として知られ」たことや、「紙面にしばしば日本の文化や歴史を紹介するとともに、近代化途上の日本および日本人の立場に同情と理解とを示した」とも描写される<sup>10</sup>。また、ハウエルが日本政府に働きかけ、短期間ではあるが、政府が毎号500部の『ジャパン・メール』を購入し、欧米各地の主要機関に送付するという特別の契約を結んでいたようである<sup>11</sup>。

『ジャパン・ウィークリー・メール』は、いくつかの面で特徴的だったようである。4面が普通だった当時の紙面を、本紙12面に広告4面と斬新に拡大し、購読料は1部50セント、年間24ドルであった<sup>12</sup>。また、先述した三大紙の中でも、『ジャパン・ヘラルド』や『ジャパン・ガゼット』という「日刊夕刊紙によるニュース速報に力をいれていた」二紙と比較し、「評論主体の週刊紙」が特徴的であり、「その記事が多彩で充実していることについては定評」があったという<sup>13</sup>。『ジャパン・ウィークリー・メール』の第1号は、1870年1月22日付で発行された。新聞名の下には、“A Political, Commercial and Literary Journal”(「政治、商業、文芸誌」と記載され<sup>14</sup>、当初から幅広い内容を扱うと掲げていたことがわかる。また、「あらかじめ一年分で1巻に合本する予定で、通し番号がつけられている」という点も、「記録を後世に残すという意思の表れ」と論じられている<sup>15</sup>。『ジャパン・メール』がハウエルの手から離れるのは1877年であり、その後、1917年に『ジャパン・タイムズ』に吸収合併されるまでに数人の経営者が関わったようである。

## 2. 姉崎正治について

姉崎正治(1873-1949)は先駆的な宗教学者として知られ、ことに日蓮宗に関する研究で名を博した国際的な学者である。東京帝国大学で学び、のちに同大学の宗教学教授として学問の発展に尽くしたことで知られる。また、当時としては珍しく、のべ十数回の渡欧や渡米をし、日本を代表する学者として国際的な学会での講演や大学で講義などを務め、年譜によれば、1919年にはカリフォルニア大学から「ドクター・オブ・ローズ」称号を授与された他、ストラルブル大学から「ドクトル・オノレール」の称号を授与され、1922年フランス政府よりコンマンドル・ド・レトアル・ノアル勲章授与、1928年同じくフランス政府からレジオン・ドヌール勲章を贈られた経歴などを持つなど、国際的に評価された人物である<sup>16</sup>。

姉崎は京都で生まれ、11歳の時には漢学塾と数学塾のほかに、「平井金三のオリエンタルホール」に通い英語を学んでいたという<sup>17</sup>。1893年には東京帝国大学哲学科に入学した。在学中は、「井上哲次郎『東洋哲学及比較宗教』、ケーベル『西洋哲学史』、外山正一『社会学』、村上専精『印度哲学』『支那哲学』、元良勇次郎『心理学』等の講義を

受講」したようである<sup>18</sup>。姉崎の日蓮宗に関する研究と信仰に大きく影響を与えた高山樗牛（本名 高山林太郎、1871-1902）の知遇を得たのも在学中である。1896年には学部を卒業後、大学院に進み、「宗教の発達」について研究を始めた<sup>19</sup>。

1900年、27歳の姉崎は東京帝国大学文科大学助教授となり、3年間の欧州留学で、ドイツ、オランダ、イギリス、フランス、イタリア、インドを廻った。姉崎自身による留学時の回想には、行く先々で出会う人々との親しい交流が綴られている。初の留学先のドイツでは、「ドイセン先生」ことキール大学教授パウル・ドイセンとその家族に世話になり、週三回の講義日には講義後の散歩、読書、昼食、昼寝、午後のティータイム、夕食、その後の新聞読みに至るまで時間を共に過ごし、講義のない日も教授宅を訪問したようで、これらの時間がドイツ語を高める助けになったことを述べている<sup>20</sup>。この留学時に、東京帝国大学に博士論文「現身仏と法身仏」を提出し学位を取得した他、学部時に同級生であった高山樗牛との文通で、日蓮宗に目覚めたようである。高山は、姉崎が留学中の1902年12月に他界しており、姉崎と高山の往復書簡は『文は人なり』として刊行されている。帰国した姉崎は、亡き畏友・高山の全集を6冊にまとめた。その他、仏教や比較宗教学に関する著書や研究論文、論考や翻訳は多数あり、一覧は『新版 わが生涯』にまとめられている他、以下に紹介するノグチによる記事にも、ほんの一部が紹介されている。

ノグチが姉崎の自宅を訪れ、『ジャパン・ウィークリー・メール』への記事にまとめたのは、姉崎が1913年9月から2年間、アメリカのハーバード大学で、日本に関する講義を担当するために渡米する前であった。姉崎は同大学で、「日本人の宗教並に道德上の発達」「日本宗教並に哲学思想の諸学派」、「日本の宗教と文学」「仏教倫理と日本人の生活」などの講義を担当し、T・S・エリオットも姉崎の講義を聴講したという<sup>21</sup>。姉崎のハーバード大学での講義を実現させたのが、姉崎が「親友」と呼ぶハーバード大学教授ジェイムズ・ウッズであることは、姉崎自身が自叙伝で述べている。同書によれば、親しくなったウッズに「日本に居られぬようになったらスイスにゆく」といったことがきっかけとなり、アメリカ行きを勧められ、姉崎をハーバード大学に招聘することはウッズの「事業の一つ」のようになったという<sup>22</sup>。ウッズは1911年来日し、日本におけるハーバード大学卒業生の会において日本の教授を置く話をまとめ、卒業生からの資金を集めるなど金銭的な面から、「若い方がいい」など姉崎を念頭に置いた条件で人事を進め、実現させたとのことである<sup>23</sup>。また、アメリカに滞在中、シカゴ大学で「日本仏教」、イェール大学で「日本美術」などの講義を行ったほか、岡倉天心が中国・日本美術部長に就任していたボストン美術館にて収蔵されている日本美術の研究関連で、仏教美術に関する講演もしたという<sup>24</sup>。姉崎はこのハーバード大学での講義を終えた後もヨーロッパや北米への出張を重ね、1930年代においては7回も海外に出向いたことから、国際舞台での講演や執筆を精力的にこなし、またそれらが国際的に評価されていたことがわかる。

なお、姉崎がハーバード大学に向けて離日した日に関しては、1913年8月30日（土曜）付けの『ジャパン・ウィークリー・メール』に2箇所、関連の記載が見つかった。“Court and Society”の欄には、「アメリカの交換教授として『エンペラス・オブ・アジア号』で木曜の朝に出発した」とあり、英国の船舶「エンペラス・オブ・アジア号」バンクーバー経由の乗船名簿にも、“Prof. M. Anesaki”と記載されている。

3. “DR. M. ANESAKI” BY YONE NOGUCHI.

*The Japan Weekly Mail*. July 26<sup>th</sup>, 1913. 【原文】

I, who have delightful recollections of a visit to a house in Brattle Street where Washington used to smoke and chat with La Fayette, would naturally turn first to the thought of American freedom, when the heavy door of Harvard University swung open to a Japanese Buddhist scholar in the person of Dr. M. Anesaki. He will soon become, this Buddhist,—not in flowing robe and scarf but in common Western clothes,—a subject of talk among the students, whose minds may not yet have subsided from excitement in listening to Rudolf Eucken. My imagination’s ears already hear a word or two from the students on the possibility of comparison of this Japanese and that eminent German professor; it would be more than amusing, indeed interesting, if we could successfully compare them. Without going into the pros and cons, I think I can say that they have a certain analogy in the sense that Japan shows a great many similar aspects, spiritual or otherwise, with modern Germany; the latter’s incongruities and contradictions, and almost bewildering confusion of wild cross currents and ambitious aspirations, might be quite well explained from the former’s ground. If Eucken’s Activism (I am no Eucken student whatever) might be said to be more meaningful for such a country as Germany, I dare say it is present Japan which has made Dr. Anesaki, like that German professor through Christianity, sing the new Buddhistic idealism, — (a book, “Buddhism and the New Idealism” or a book perhaps with a better title than that, should come from Dr. Anesaki’s pen some day),—from the point of emphasis of the soul of the individual. He is really a true follower of the great Nichiren, the founder of the Nichiren sect of Buddhism; or it may be more true to say he is a wise adapter of that sect for the present needs of Japan. I almost feel justified in speaking of Eucken and Anesaki in the same breath; when I think of them at the same moment, Kipling’s lines come to my mind:

“But there is neither East nor West, Border nor Breed nor Birth  
When two strong men stand face to face, tho’ they come from the ends of the Earth.”

Indeed these two scholars come from the antipodes of Christianity and Buddhism, but these are, are they not, merely different names when we consider the real questions of Truth and Life. Physically Dr. Anesaki is not a robust type of Eucken’s revivalist whose tremendous force of earnestness would shake a generation materialistic and indifferent; he is calm and even pale in face, tall and slender in body, a figure on whose shoulders a Buddhistic robe would fittingly lie. His still eyes express how deep and clear his thought advances. We know him as the graceful type of Japanese known as a Kyotoan.

Dr. Anesaki’s Buddhistic study was begun early in his life—(by the way he is Professor of the Science of Religion in the Imperial University, Tokyo); his interest in the comparative study of religions, I am told, was much stimulated in his undergraduate years, by such books as Kidd’s *Social Evolution*, or Lang’s *Myths, Ritual and Religion*; or Taylor’s *Primitive Culture*,

whose popularity some twenty years ago was quite great. Although many volumes of religious investigation—(*History of Indian Religions*, 1898; *The Personality of Buddha, its Aspects in History and Faith*, 1904; *The Four Buddhist Agamas in Chinese and Pali Counterparts*, 1910, included)—are credited to his already distinguished name, he is still a young man, as he was born in 1873. I am sure he thinks his best book is yet to be written. His international reputation in his special line, that is in Oriental philosophy, was well established when he published *Religions in Japan* (in the *Encyclopedia Americana*), *How Christianity appeals to a Japanese Buddhist* (the *Hibbert Journal*, Oct. 1905); *Asaṅga, Asvaghosa, Buddhist Docetism, Buddhist Ethnics and Morality*, etc. (in the *Encyclopedia of Religion and Ethics*); and his important work on *Buddhism, in its Fundamental Aspect as a Religion*, I believe, is going to be brought out soon in America. He writes well both in English and French; and it is idle to dwell on his ability in Japanese writing, since he has written not only philosophical treatises, but also many beautiful prose works and even stories and sketches. He published *Fioretti a Italia* in Japanese, in 1909, as the result of a pleasing journey he enjoyed under the benefit of *La Bourse pour la tour autour du monde* which Albert Kahn donated also to the Imperial University of Tokyo; the beautiful easy style of the book caught the public attention and revived the interest of some fifteen years ago, when he was ambitious even as a prose writer.

As everybody else who has studied Buddhism in Japan—(it is a known fact that no Buddhism today exists in China or even in India)—Dr. Anesaki was pleased at first, I believe, to understand it through its pessimistic attraction; it is due to Schopenhauer, to whom Dr. Koeber of the Imperial University of Tokyo first introduced him, and whose thorough study he completed under the guidance of Prof. Densen of Kiel, that he was brought outright before the brighter phase of that Buddhism. It may have been about the same time that he began to study the Nichiren sect of Buddhism and the life of the priest Nichiren, its founder. There is no more wonderful story than that of this Nichiren, who was born to a fisher's family in Awa province on January 1222. He exclaimed at the beginning of his establishment of his own sect: "Know that the Jodo sect is a way to Hell; the Zen, the teaching of infernal hosts; the Shingon, a heresy to destroy the nation; and the Ritsu, an enemy of the land. These are not my words, but I found them in the Sutra. Hark to the cuckoo above the cloud. He knows the time, and warns you to plant. Plant now therefore, and do not repent when the harvest season comes. Now is the time for planting the Lotus Sutra, and I am the messenger sent by the Worshipful for that end." Under the fervent tongue of the propagandist, he thus attempted to destroy by one stroke the old formulae and conceptions in emphasizing the individualistic fire of Buddhistic inspiration through whose activity he himself, as he professed, was the symbol of the infinite; his mysticism was founded upon his prophetic inspiration. When Nichiren laid stress upon the fusion of the individual with the sacred law or their perfect harmony his mind dwelt on the religious freedom born out of the idealism whose real manifestation can only appear through the highest development of the individual. Therefore Nichiren declared that he was a messenger sent by the Worshipful, in another expression, the Lotus Sutra personified. How modern and new is Nichiren's teaching! If you can find an analogy between this Buddhist priest of the

thirteenth century and Eucken's philosophy or philosophical theology, you can very well see the meeting ground of the German professor and Dr. Anesaki, who is a devotee or follower of the great Nichiren. I turn the pages of a new book entitled *The Late Takeyama and Nichiren*, the former being the very person who inspired Dr. Anesaki with the greatness of Nichiren. (I cannot help thinking of the friendship of Tennyson and Hallam when I think of the friendship of Takayama and Anesaki). In a little preface I find a part saying: "I cannot spend the day of the Takayama anniversary at Kiyomigata as heretofore. But I shall lecture on Shotoku, Denkyo and Nichiren in the classroom of Cambridge; with that I will make my own offering to my dead friend from far away."

I used to linger round the spot at Kamakura where the monumental stone for Nichiren's street preaching stands, and call to mind his undaunted spirit and belief in the Mysterious Law of the White Lotus which he professed he alone had found, and the continuous persecution he encountered of gibes, railings and even stones. But to-day in this enlightened age the follower of Nichiren has no difficulty in his propaganda. The establishment of the Association Concordia of Japan, for which Dr. Anesaki has become one of the most active workers in his expression of a desire for a religious belief adapted to the social need of the present time, shows a great change between the times of Nichiren and of Dr. Anesaki, especially in their methods of propaganda. As the name of the Association indicates, the society aims at bringing about a perfect understanding of the East and West through religion and philosophy; the society recently issued a letter of appointment of Dr. Anesaki as delegate of the Association to the Association Concordia of America, and entrusted to him to investigate the various tasks necessary to make the Japanese Association fully influential. In the first report of the Association just come from the press I find a little less than two hundred names distinguished in the world's religion and philosophy, H. Bergson, John Dewey, Eucken, Wundt and others included, who have expressed sympathy and co-operation. The report prints a long letter written by Dr. Sydney Gulick to the Rev. Jas. L. Barton of the American Board of Commissioners for Foreign Missions; in it I find the following in connection with Dr. Anesaki: "I well remember the religious enthusiasm with which Dr. Anesaki maintained that Kyoiku Chokugo (the Imperial Rescript on Education) in its dignity of expression and in the nature of its moral instruction, and its ethical foundation, was fitted to promote religion in Japan, especially when interpreted in the light of such passages as the Lotus of the Law (Hokke Kyo)." Indeed Dr. Anesaki rises and falls with his religious belief.

"I do not go to America," he said to me the other day, "either as an apologist or as a propagandist; when I stand in the Harvard classroom I wish to maintain the dignity and the prudence of a mere scholar from the beginning to the end." In that I believe he desires to differentiate his own special position from that, for instance, of the Exchange Professor recently sent from America in the person of Dr. Mabie. To see the establishment of a new chair in Harvard in the light of a sign of American recognition of Japan's attainment in science as well as the importance of Oriental culture is most flattering. As I said before, it is only in Japan that the real Buddhism exists to-day; and if Japanese civilization, old or new, cannot be well interpreted without that religious background, as is a fact, all we Japanese fully endorse Dr.



Anesaki's appointment to the chair on Japanese Literature and Life, which is quite significant in itself. Dr. Anesaki's courses of lectures are divided into two parts. One part is special and scientific, the subjects being such as the Pali Texts of Buddhism and their Chinese counterparts, which is his own special study. When he compares the Oriental religions with Western thought, I think he will prove himself to be at his strongest. Dr. Gulick remarked in the same letter I mentioned above: "Dr. Anesaki is evidently quite familiar with the subject of comparative religion as it has been developed in the West. Although regarding himself as a Buddhist, he is nevertheless so thoroughly acquainted with Christianity, both in its doctrines and history, that many look upon him as more nearly a Christian than anything else."

He spoke to me, in the course of our talk, of Prof. Woods of Harvard University, who was the moving spirit for the establishment of the new Japanese chair; he delightfully dwells on how he and Prof. Woods were fellow students at Queen's College at Benares in India some ten years ago, and how they talked on the importance of such a chair, which has only been realised today. "It is not far wrong to say that that chair was already established in Benares in 1903," I said to Dr. Anesaki, to whom I bade good-bye and God-speed when I left his home the other day.

#### 4. 「姉崎正治博士」ヨネ・ノグチ【翻訳】

ブラトル通りに面したワシントンの邸宅<sup>25</sup>は、彼がよくラファイエットと煙草をくゆらせながら談笑していたところで、私もそこを訪問した楽しい思い出がある。ハーバード大学の重い扉が、日本の仏教学者である姉崎正治氏に開かれた時、私は自然とアメリカらしい自由について思い至った。この仏教学者・姉崎——袈裟と横皮を身に纏う代わりに普通の洋服を着ているのだが——は、ルドルフ・オイケン<sup>26</sup>氏の講義を聴講し興奮から冷めやらない学生たちの話題をさらうであろう。私の想像上の耳にはすでに、この日本人と高名なドイツ人教授をいかに比較することができるかについて、学生たちが一言二言話すのが聞こえてくるようである。私も、両教授を上手く比較できれば実に刺激的であると思う。賛成か否かはさておき、私は、両氏には一つの共通点があると考えている。それは、精神面やその他あらゆる面において、日本と現代のドイツとが極めて似ているからである。現代のドイツにおける不一致と矛盾、また当惑させるほど荒々しく対立する考えや野心的な大望については、日本で既によく説明されているといえる。もし、オイケンの積極的行動主義が（私はオイケンを研究する者ではないのだが）ドイツのような国にとって一層意味があるというのであれば、私は敢えて、新たな仏教徒の理想主義を唱える姉崎博士を生み出したのは、ちょうどキリスト教がオイケン教授を生み出したように、現在の日本であると論じたい（姉崎博士はいずれ、例えば『仏教と新理想主義』のような、あるいはもっと気の利いた題名の著書を出版されるだろう）。というのも、新たな仏教徒の理想主義は個人の精神に重きを置いたものだからである。姉崎博士は真に日蓮宗の開祖である日蓮聖人の門弟である。あるいは、現在の日本における必要性を考慮した上で日蓮宗を翻案している、と言う方がより真実に近いだろう。私はオイケン教授と姉崎教授を同様に語る事が正当であるように感じると言ってもよい。

私は、両氏を一緒に考えると、キプリング<sup>27</sup>の一文が私の心に浮かぶ。

されと東もなく西もなく、国境も人種も生まれもあらず、  
ふたりの強き男、面と向かい立つときは、たとえ地の果てから来るとて。<sup>28</sup>

確かに両教授は、キリスト教と仏教という対極からの出である。しかしそれらは、異なる名称を掲げながらも、我々の真の問いである真実や人生について熟考しているのである。姉崎教授はその体裁においては、オイケンのように恐ろしいほどの誠実さで物質主義と無関心さの世代を揺さぶる、力強い信仰復興運動者という性質ではない。姉崎教授は、落ち着いているばかりでなく、色白の顔にすらりとした長身で、その肩には仏教の袈裟がちょうどよく収まる。その静寂な目には、奥深く明白な思考の進展が表れている。我々は姉崎教授を奥ゆかしい日本人として有名な京都人のように理解している。

姉崎教授は仏教研究を幼少期に始めている。(同氏は東京帝国大学の宗教科学の教授である。) 私が聞き及んだところ、姉崎教授の比較宗教学への関心は、学部時代に学んだという、[ベンジャミン・] キッド著『社会進化』、[アンドリュー・] ラング著『神話・儀式・宗教』、[エドワード・] タイラー著『未開文化』などから多大な影響を受けているそうである。これらの著書は、20年ほど前には大変人気があったものである。姉崎教授による宗教に関する研究書の多く(『印度宗教史』1898年、『現身仏と法身仏』1904年、「漢訳中阿含とそのパーリ訳」<sup>29</sup>1910年などを含む)は、同氏が1873年生まれでまだ若いにも関わらず、すでに確立された専門家としての功績の証である。私は、姉崎教授を代表する著書は、これから執筆されるものと確信している。姉崎教授の東洋哲学者としての国際的な名声は、「日本における宗教」(アメリカの百科事典に含まれる)、「キリスト教は如何に日本人仏教徒の心に訴えるか」(『ヒバート・ジャーナル』1905年10月)、「無著」<sup>むぢやく</sup>、「馬鳴」<sup>めみょう</sup>、「仮現説(仏教徒)」、「倫理学と道德性(仏教徒)」など(宗教倫理百科事典に掲載)によって確立されたのである。また教授の重要な研究である『根本仏教』は、近い将来アメリカに紹介されるだろう。姉崎教授は英語とフランス語で見事な文章を書かれる。また、教授はこれまで哲学に関する論文の他、素晴らしい散文や物語、描写などを数多く日本語でまとめられており、日本語の文章も遜色ないことがわかる。姉崎教授は、1909年、日本語で『花つみ日記』を出版した。それは、アルベール・カーンが東京帝国大学に寄贈したアルベール・カーン奨学金から援助を受け、楽しい旅行をしたことがきっかけで生まれた作品である。美しく簡素な文体で綴られた同書は人々の目に留まり、それは姉崎氏が15年も前に抱いていた、作家になりたいという野心を蘇らせた。

日本で仏教を学んだ人の例に漏れず、(今日、中国や印度ですら、仏教はもはや消滅したというのは周知の事実である) 姉崎博士は、厭世主義的な魅力から仏教を理解するということが、当初は満足されていたであろうと私は考える。姉崎氏は、東京帝国大学のケーベル教授<sup>30</sup>からショーペンハウエルについて紹介されたことが起因して、キール出身のドイセン教授<sup>31</sup>の指導の元、ショーペンハウエルについて学び遂げた。そして博士は、仏教の明るい側面を見るに至ったのである。それと殆ど同時期に、日蓮宗について学び始め、宗祖である日蓮聖人の生涯についても調べた。1222年1月に安房国の漁

師の家に誕生した日蓮聖人の話ほど不思議なものはないだろう。日蓮は、自身の宗派を設立した当初、次のように叫んだ。

浄土宗は地獄への道、禪宗は地獄の主人の教え、真言宗は国を滅ぼすための邪教、そして律宗は国家の敵であるということを理解しなさい。それは私の言葉ではなく、私が經典の中に見つけた言葉である。雲の上のカッコウに耳を傾けなさい。カッコウはしかるべき時期を心得ており、貴方に植樹するよう忠告する。それに従って苗木を植え、収穫時に後悔しないようにしなさい。今こそ法華経を植え付ける時である。そして私はそのために釈尊が遣わした使者なのだ<sup>32</sup>。

この強烈な熱弁で、伝道者である日蓮は古い条文と概念を一蹴し、仏教の源である個人的な熱情を強調した。それは、日蓮自身が永遠という概念を象徴すると公言し、日蓮の神秘主義は予言的な靈感の基に創られたのである。日蓮聖人が、個人と神聖な律法の融合や、それらの完全な調和を強調する時、彼の精神は、理想主義の産物である宗教的な自由と一体なのであり、この理想主義が真に出現するのは、個人としての最も崇高な発展からのみなのである。したがって日蓮聖人は、自身を釈尊の使者であると宣言した。すなわち法華経を身をもって実現したのである。日蓮の教えは何と新しく近代的なことか！もし、13世紀の仏教の僧侶とオイケンの哲学あるいは哲学的神学に共通点を見出すことができれば、このドイツ人オイケン教授と日蓮の門弟である姉崎博士との接点が自ずと明らかになるだろう。私は、新著『高山樗牛と日蓮上人』のページをめくった。高山氏<sup>33</sup>というのは、姉崎博士に日蓮の偉大さを説いた人物である。(両氏の友情に思いを馳せると、テニソンとアーサー・ハラムの友情が頭に浮かんでくる。) 短い序文の中で姉崎博士は「今後、高山氏の命日を清見潟で過ごすことは難しくなる。しかし、ケンブリッジでの授業で、聖徳、伝教、日蓮について講義することを通し、遠くから亡き友人へ供養したいと思う」と記している。

私はよく、鎌倉の日蓮上人辻説法跡の石碑周辺を散策し、日蓮聖人の大胆な精神や『妙法蓮華経』の信念を心に呼び起こしていた。これは日蓮聖人が見出したもので、愚弄、罵り、投石などによる迫害も絶えなかった。しかし、文明の進んだ今日では、日蓮宗を伝道することに支障はない。日本コンコルディア協会設立の際、姉崎博士は現代の社会における必要性に準じた宗教的信仰への願望を最も精力的に論じた一人である。そこには、日蓮聖人と姉崎教授の時代に隔たる変化、ことにその伝道方法の違いが現れている。上記の協会は、その団体名から明らかなように、宗教と哲学を通して東洋と西洋とが完全に理解することを目指している。同協会は先日、姉崎博士をアメリカ・コンコルディア協会への日本協会の代表者と任命する旨を、文書にて発表した。日本の協会を可能な限り有力にするために、様々な課題の調査を姉崎博士に託したのである。協会の最初の報告書は最近発行されたばかりである。そこには、二百弱もの世界の宗教や哲学分野の重鎮たちの名前が並んでいる。その中にはアンリ・ベルクソン、ジョン・デューイ、オイケン・ウントなどが含まれ、彼らは共鳴と協力の意を表している。同報告書には、シドニー・ギューリック博士からアメリカの海外伝道組織であるアメリカンボードのJ.L.バートン牧師<sup>34</sup>への長い手紙も掲載されている。その中で、姉崎博士に関する次の部分

があった。「私は、姉崎博士の宗教に向けられた情熱を忘れることはないでしょう。教育勅語の表現の威厳さや本質的な倫理教訓、道徳上の基礎は日本において宗教を促進するに相応しいものでした。特に法華経という観点で解釈される時にそうだといえます」確かに、姉崎博士は宗教的信念には浮き沈みがある。

ある時、博士は私に「僕は護教論者や伝道者としてアメリカに行くのではない。ハーバードの教壇に立つ時は終始一貫して一人の学者としての威厳と慎重さを保っていたいのだ」と言われた。博士は、最近アメリカから来日した交換教授のマビー博士<sup>35</sup>のような立場とは違いを付けることを望まれたのだろう。ハーバードで新たな講義が設立されるということは、アメリカが日本の科学的発達や東洋文化の重要性を認識しているという証拠であり、非常に喜ばしいことである。前述したように、今日まで真の仏教が存続しているのは日本だけなのである。日本の文明は、古かろうと新しかろうと、宗教的背景がなくては解釈できないものであることから、我々日本人としては、姉崎博士が日本文学と生活という分野で講義することを全面的に支持するものであり、この講義開催自体が素晴らしいことである。姉崎博士の講義は二部に分けられている。一部は、専門的で科学的な視点から、「パーリ語仏典と漢文四阿含」など博士の専門分野に関するものを扱う。博士による東洋の宗教と西洋的思想の比較は、博士の最も得意とするところであろう。先に触れた手紙でギュリック博士は、「姉崎博士は、明らかに、西洋で発展してきた比較宗教という分野に精通している。自身は仏教徒であるというが、キリスト教の教義や歴史を熟知しておられる。そのため、多くの人々が博士をキリスト教徒と見なすのである。」と記されている。

姉崎博士と話した際、ハーバード大学で日本に関する講座の設立に際し、主導的に尽力されたウッズ博士<sup>36</sup>について語られた。両博士は、10年ほど前、インドはベナレスのクイーンズ・カレッジで共に学ばれた際、このような講座の重要性について話されていたのが、今回やっと実現したのである。私は、「1903年に既にその講座がベナレスで設立されていたと言えるでしょう」と言い、別れの挨拶をし、成功を祈願して姉崎氏の家を後にした。

## おわりに

ヨネ・ノグチと姉崎正治がどこで最初に接点を持ったのかは定かではない。しかし、慶應義塾を中退し日本を離れて独学で詩作を始めた詩人ヨネ・ノグチと、東京帝国大学での勉学を経て宗教学者となった姉崎正治は、その経緯は大きく異なるものの、わずか2歳違いの同年代であり、日本の西欧化が急速に進む混沌とした明治期に、若くして西洋に中長期間滞在した先駆的な二人である。日本人として西洋で発言や執筆を通し、日本人として実際に発信していた二人でもあった。ノグチが姉崎についてその経歴や著作、研究を中心に紹介していることから敬意が感じられ、姉崎がハーバード大学で講義することの歴史的快挙を素直に喜んでいるようにも見られる。この取材前後にノグチと姉崎の間にどのような交友があったのか否かについては、今後の研究を待つことになる。

注

- 1 亀井俊介監修・解説『詩集・小説・評論』6巻および別冊解説2007年、稲賀繁美監修・解説『浮世絵および日本美術評論集』3巻および別冊解説2008年、亀井俊介監修・解説『ヨネ・ノグチとリトル・ポエトリー・マガジン』3巻および別冊解説2009年
- 2 2016年9月現在で把握されているノグチが執筆した記事とその初出は、星野文子「*The Japan Weekly Mail*とヨネ・ノグチ 1913-14年の渡英で再確認した詩人像」を参照されたい。
- 3 鈴木雄雅「解説 日本における初期欧字紙について」p.ix.
- 4 斎藤多喜夫「『ジャパン・ウィークリー・メール』について」p.5.
- 5 鈴木雄雅「『ジャパン・メール (*The Japan Mail*)』」p.v.
- 6 鈴木雄雅「解説 日本における初期欧字紙について」p.ix.
- 7 同上
- 8 浅岡邦雄「初期『ジャパン・メール』と明治政府」p.5.
- 9 斎藤 p.6.
- 10 浅岡 p.5.
- 11 同上 pp. 6-9.
- 12 斎藤 p.5.
- 13 同上
- 14 なお本稿ではエディション・シナプス社による復刻版の『ジャパン・ウィークリー・メール』を参照にした。
- 15 斎藤 p.5.
- 16 「姉崎正治略年譜」pp.163-168.
- 17 姉崎正治『新版 我が生涯姉崎正治先生の業績』 p.156.
- 18 寺田喜朗「姉崎正治の日蓮論—明治アカデミシヤンの日蓮イメージ」 p.24.
- 19 同上 p.158.
- 20 姉崎 pp.83-85. また、姉崎は、英語、ドイツ語、フランス語を駆使し、ギリシャ語、ラテン語、サンスクリット語、パリー語を読む事ができたとと言われる。(寺田、p.21.)
- 21 姉崎 p.163.
- 22 同上 p.101.
- 23 同上 pp.101-102.
- 24 同上 p.104.
- 25 マサチューセッツ州ケンブリッジ市ブラトル通りに面した家屋。ジョージ・ワシントン (George Washington, 1732-1799) アメリカ合衆国初代大統領が1775-76年に司令部としていた。ラファイエット (Marie-Joseph Paul Yves Roch Gilbert du Motier, Marquis de La Fayette, 1757-1834) は、フランスの公爵、軍人、政治家。同宅は、19世紀にはアメリカ人詩人ヘンリー・ワーズワース・ロングフェローが約半世紀にわたり住んでいた。
- 26 ルドルフ・クリストフ・オイケン (Rudolf Christoph Eucken, 1846-1929) ドイツの哲学者、ノーベル文学賞受賞者
- 27 ジョセフ・ラドヤード・キプリング (Joseph Rudyard Kipling, 1865-1936) ボンベイ生まれのイギリスの小説家、詩人。

- 28 キプリング「東と西のバラード」(“The Ballad of East and West”) 本稿に使用した訳は、次の文献から引用した。マシュー・M・ハンリー著、橋本楨矩訳「キプリングの詩と韻文」、橋本楨矩、高橋和久編『ラドヤード・キプリング 作品と批評』松柏社、2003年、p.250。
- 29 おそらく英語論文“The Four Buddhist Agamas in Chinese and Pali Counterparts”(TASJ, vol.36, 1909)を指している。本論文の邦題は、日本語で書かれた論文2本、「漢訳中阿含とパーリ伝」(『哲学雑誌』235、1906年9月、pp.771-787.)や「パーリ中部聖典とその漢訳」(『哲学雑誌』236、1906年10月、pp.871-881.)を参考にした。
- 30 ラファエル・フォン・ケーベル (Raphael von Koeber, 1848-1923) ロシア系ドイツ人、お雇い外国人として1893年から1914年まで東京帝国大学に在籍、哲学、および西洋古典学を教え、講義を受けた学生には夏目漱石も含まれる。ケーベルは学生時代、ルドルフ・オイケンに学んだようである。
- 31 パウル・ドイセン (Paul Jakob Deussen, 1845-1919) キール大学教授。ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェの友人であった。姉崎がドイセン宅を訪問中について次のような記載がある。「夕食後に新聞を読んでいる時、ニーチェ長逝の電報がついた。先生は、Oh! Armer Freund! と言ったのみで、あとは瞑目していた。幼児以来の親友、それが持説の上で相反するに到った友に対する先生の情をくみ、自分も涙を呑んだ」とある。(姉崎、p.86.)
- 32 ノグチの英語記事を本論文執筆者が翻訳したものであり、日蓮宗関連の書物からの引用ではない。
- 33 高山樗牛 (本名 高山林太郎、1871-1902)
- 34 ジェイムズ・レビ・バートン (James Levi Barton, 1855-1936)
- 35 ハミルトン・ライト・マビー (Hamilton Wright Mabie, 1846-1916)
- 36 ジェイムズ・ウッズ (James Woods, 1863-1935) アメリカのインド学者。ハーバード大学教授。姉崎は自伝で次のように述べている。「ハンブルヒ (ママ) でも会い、又キールでも会ったハーバード大学のウーズ (ママ) はのちに印度旅行を共にした。この親友を得たことはこれ以後自分の一生に大関係ある事であるが、その時はまだほんの面友であった。この親友は後屢々日本へも来たが、一九三五年東京で亡くなり、自分はその最後 (ママ) を送った。」(姉崎、p.93.)

## 引用文献

- 浅岡邦雄「初期『ジャパン・メール』と明治政府」復刻版『ジャパン・ウィークリー・メール』第一期第2回配本1875-1879年、別冊付録、Edition Synapse, 2006年
- 姉崎正治『新版 わが生涯 姉崎正治先生の業績』大空社、1993年
- 稲賀繁美『ヨネ・ノグチの浮世絵および日本美術評論集について』Edition Synapse、2008年
- 亀井俊介『解説 復刻版 ヨネ・ノグチの英文著作集～詩集・小説・評論～』Edition Synapse、2007年
- \_\_\_\_\_.『解説 ヨネ・ノグチ英文著作集3 ヨネ・ノグチとリトル・ポエトリー・マガジン』Edition Synapse、2009年
- 斎藤多喜夫「『ジャパン・ウィークリー・メール』について」復刻版『ジャパン・ウィークリー・メール』第一回配本1870-1974年、別冊付録、Edition Synapse, 2005年、5-10頁

- 鈴木雄雅「解説 日本における初期欧字紙について」北根豊編『日本初期新聞全集』1  
ぺりかん社、1986年、ix-xi頁
- \_\_\_\_. 『『ジャパン・メール (*The Japan Mail*)』』同上 26、ぺりかん社、1986年、v-vi頁
- 寺田喜朗「姉崎正治の日蓮論——明治アカデミシヤンの日蓮イメージ」『中央学術研究  
所紀要』第44号 2015年、21-38頁
- マシュー・M・ハンリー著、橋本楨矩訳「キプリングの詩と韻文」、橋本楨矩、高橋和  
久編『ラドヤード・キプリング 作品と批評』松柏社、2003年
- 星野文子「*The Japan Weekly Mail* とヨネ・ノグチ 1913-14年の渡英で再確認した詩人像」  
『和洋女子大学紀要』第57集、2017年3月、15-25頁
- 堀まどか『『二重国籍』詩人 野口米次郎』名古屋大学出版会、2012年
- エドワード・マークス著、羽田美也子、田村七重、中地幸共訳『レオニー・ギルモア  
イサム・ノグチの母の生涯』彩流社、2014年
- The Japan Weekly Mail: A Political Commercial, and Literary Journal 1870-1917* (Reprint  
series). (復刻版『ジャパン・ウィークリー・メール』) Edition Synapse in association  
with Yokohama Archives of History, 2005-2015.
- The Lark*. No.15, July 1896. *Yone Noguchi and the Little Magazines of Poetry. Collected  
English Works of Yone Noguchi*. Edited by Shunsuke Kamei, Edition Synapse, 2009.
- Noguchi, Yone. “Dr. M. Anesaki”. *The Japan Weekly Mail*. July 26<sup>th</sup>, 1913. *The Japan Weekly  
Mail: A Political, Commercial, and Literary Journal 1870-1917* (Reprint series). vol.123  
(July to September 1913).
- \_\_\_\_. *The Spirit of Japanese Poetry*. 1914. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems,  
Novels and Literary Essays*. Edited by Shunsuke Kamei, Edition Synapse, 2007.
- The Ogden Standard*. “Buddhist Priest on Harvard’s Faculty.” January 31<sup>st</sup>, 1914.  
<http://chroniclingamerica.loc.gov/lccn/sn85058396/1914-01-31/ed-1/seg-14/> (最終閲覧日  
2018年2月19日)

本論文は、都留文科大学大学院共同研究からの助成を受けた共同研究「ヨネ・ノグチの英文著作研究」(研究代表: 都留文科大学教授・中地幸、共同研究者: 愛媛大学准教授・Edward Marx, 和洋女子大学助教・星野文子) の研究成果の一環である。翻訳は主に都留文科大学大学院生の早川真理子、宮田真澄が担当した。

また、本論文は2017年11月12日、日本比較生活文化学会第33回研究発表会での星野文子による発表「英字新聞 *The Japan Weekly Mail* とヨネ・ノグチ」に基づいたものである。

Received: November 30, 2017

Accepted: December 06, 2017